

角川財団学芸賞選考委員会より

## 見神・小林秀雄の目を辿る

松岡正剛

今回の選考は、明田川融『日米地位協定』、小川剛生『兼好法師』、中島岳志『親鸞と日本主義』、若松英輔『小林秀雄 美しい花』を対象に検討したのだが、僅かの差で若松氏の一冊が学芸賞にふさわしいと評価された。僅差になった理由には、対象書が既存の著作を上回ったか、新たな方向性を示したかという見方も反映されている。

小林秀雄をどのように議論するかというのは難問である。これまで多くの試みがなされてきたが、図抜けたものはない。若松氏はそれらの議論を踏まえてはいるが、そこに囚われず、見神としての小林が向かおうとした軌跡のゆらぎを丹念に追った。評伝をめざしているけれど、多分に美学的で存在学的な小林像を綴った。

小林は昭和日本にはまだ出現しきれていなかった「批評」を確立した。たんなる文芸批評ではなく、自身の「目」に適うところをまさぐることをもって批評とした。そのためにドストエフスキー、ランボー、無常、堀辰雄、能、ヴァレリー、本居宣長などが選ばれ、富永、中原、志賀、中野、大岡らとの親しくもきわどい交流が継続された。それらを通して小林の「目」は何に向かっていたのか、どんな基準や価値観が動いてきたのか、そこを検証するべく若松氏の記述が進んだ。

小林には「美しい花」がある、「花」の美しさという様なものはない」という一文がある。この一文に象徴されるように、小林の目は「美しい花」を索漠の裡にほったらかしにしないためには、何を見極めればいいのかということに注がれていた。若松氏はその「美しい花」への左見右見とみこうみに照準を絞って本書を綴ったのである。

この綴り方がすこぶる独特だった。すでに若松氏は井筒俊彦や内村鑑三や石牟礼道子らを、かれらの裡なる靈性を見逃さないように描いてきたが、その綴り方が「難問の小林」にも向けられたのだ。ただし今度は靈性ではなく「美」の見極めだ。そこを操縦する小林の「目」だ。こういう小林論はなかった。小林の息遣いが伝わってくるようだった。